

全学図書分類目録

谷口寛一郎

250万冊の京大図書総合分類目録などできないし、また必要でないようにも言われるが、無いのが不思議に思われる。20年で復興した日本である、予算は伴うができると思う。「まず分類せよ、次に目録せよ」という言葉通り分類が先である。技術的に半数の図書は司書の手で図書を見ないでもできる、残りの半数は図書を見て、その残りは専門教官に教えていただく。すなわち部局から図書が本館に送られるまでに特にむつかしい図書の分類はNDCをどしどし展開もし、また訂正もして図書に書入れておいてもらう。部局には特殊な分類表を使用している向が多いがNDCとの関連を検討しておけば役に立つ。カードだけを分類排列するのであるから、その訂正は容易である。閲覧室用著者カードは事務用を兼用しむしろ解体して分類用に使用し、そのカード以前のものは昔の小型カードから簡単な1枚を作成する。1枚とは重複や続紙など不要、教室名も不要ということである。裁断せられ著者順または分類別に整理せられたLCカードを摘出してもよい。何分大量の図書なので分類は小目を必要とするが著者記号等一切不要である。和漢洋書を一連に排列する。どの分類にどんな図書があるかを知るだけで足りる。分類の原則を守り、整理の方針が定まれば、目録作成と同時に分類を入れる、主任司書は校閲者となり統一をはかることが肝要である。

私は昭和23年から文学部図書のNDCによる分類目録に着手したが、どの教官もむつかしい図書の分類について懇切に教えて下さった。今日では20数万枚に達していよう、参考資料になっているならば幸いである。

先輩の話になるが、当時は教室図書カードの裏面に本館の分類が書込まれ、他日に備えられた。しかし分類目録が実現しなかった事は分類は決して容易なもので無い事を物語っている。しかし私はフェニックスになっても50年先の新式京大図書館の一角に全学図書分類目録が備付けられているのを見たい。

「静修館」の額が火災の際学生の手により救出せられたことはありがたかった。すべてが貴重な文献である。その管理、整理と運用、いずれもそれぞれ別なむつかしさはあるが、私達は最善を尽して、後世に文化遺産として伝えたいものである。

—— 資料紹介 ——

- 全日本出版物総目録（国立国会図書館編）昭和39年版
昭和39年度中に国内で刊行された出版物を収録したものである。「図書の部」と「逐次刊行物の部」に大別し、それらの中を官公庁発行のものと、一般発行のものに分けてある。後者は「日本十進分類法」の主網により、アルファベット順に排列してあり、「地図」「楽譜」は別項とし、巻末に書名索引が付いている。ただ注意することはこの目録は刊行が1年余り遅れるので、それを補うため出版年鑑（出版ニュース社編）を併用すると便利である。本館には昭和23年度より所蔵している。
- 全国公共図書館逐次刊行物総合目録（国立国会図書館編）第4巻 中国、四国編
これにより遠隔地の法令、新聞、雑誌、研究報告、年刊統計書、名簿、目録類等の所在を知り、地方誌等の資料の収集に役立てることが出来る。昭和38年度より5年計画で地方別に編集刊行中で第1巻近畿編、第2巻東海北陸編、第3巻関東編、第4巻中国、四国編まで刊行された。
- 学術雑誌総合目録自然科学欧文編（文部省大学学術局編）1966年版
本誌 Vol 2, No. 5 で既報の本目録は関係方面の要望によりその収録範囲を主要大学、研究機関のみにとどめず全国の国公立研究機関をも含む大規模なものとするため、文部省は昭和35年度から3年計画で各編の増補改訂版を作成することとし、まず自然科学欧文編1966年版が出版された。以上の目録は参考室に備付けてあるから利用されたい。
- 東海道幹線工事誌（東京幹線工事局編）
東京一大阪間515軒を5年半で完成、国鉄の総力を挙げて竣工した工事報告書である。一般編、土木編、電気編の3分冊になっており、他に静岡幹線工事局編も一緒に寄贈された。専門家にとっても良き研究資料となるであろう。